私のなかの青春

堀辺

昭和出版刊

作家の自画像 2

私のなかの寺　定価八〇〇円

昭和四十七年三月三十日　第一刷

著者　水上勉

装幀　山下啓子

発行者　吉富達彦

発行所　株式会社　昭和出版

東京都大田区西蒲田二丁目六―一八
〈広伸理工ビル〉　郵便番号一四四
電話／〇三―七五三―六七三六番
振替／東京　一五八、三九六番

印刷・東銀座印刷／製本・小高製本

© T. Mizukami 1972 Printed in Japan

0095―721102―3330

私のなかの寺＊目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

私の自画像
わが心奥の風土 9
随想
雁の話 35
雁帰る 42
衣笠山・等持院 46
母 50
じじばばの記 61
雲水に帰れ 110
彼岸の花 125
安心立命 129
葬式考 132
古き京菓子 142

小説
真徳院の火　159
破衣の人　190
石山　208
紀行
等持院と円光寺　233
嵯峨野慕情　237
丹波の乳垂れ銀杏　251
湖北巡礼　263
波暗き与謝の細道　280
対談
私の歩んだ道　301
あとがき　319

私のなかの寺

水上　勉

私の自画像

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

わが心奥の風土

在所は若狭である。福井県大飯郡本郷村大字岡田といった。いまは村は町に昇格して「大飯町」と名を変えた。岡田部落は、海辺から半里ほど谷を入った山裾にある。四囲竹藪にかこまれた集落で、生家はコジキダンという村の段の上にあった。コジキダンとは「乞食谷」かと解釈していたが、最近になって古色谷ではないか、という人がいた。家は父の業である大工にそぐわぬあばら家で、二年に一どはふきかえねば腐る藁ぶき入母屋。囲炉裏のある板の間が一つと、畳を敷いた部屋が一つ。電灯もなかった。座敷から土間までさしわたした針金をランプが移動した。

二つ三つのころから母は「日が暮れたら寝ェ。陽が出たら起きィ」といった。油代が惜しかったせいである。したがって夜は読書などしたことがない。電灯は私が五つのころはわずかの間あったらしい。家の表に腕ほどの太さの柱が立っていて、先端に白磁製の釘が二本さしこまれているのがみえたが、秋末の一日、腰にペンチをつるした工夫がきて、そこまでのびていた引込線を

切って帰った。

それでわが家は本線から絶たれたのである。柱の白磁の釘にまいたコードがハサミの形で空にういていたのと、戸口の軒端にさしこまれたこれもコードをさしこむ絶縁棒が二本、ち切れたトカゲの尾のようにかなしかった。村から灯を断ちきられたわが家はそれから二十数年。つまり大正十年ごろから太平洋戦争の終末、昭和十九年ごろまで、京都電燈株式会社の後身、関西配電若狭本郷出張所から「デンキ」を送られずにすごすことになる。

父はまったく家を放ったらかし、母に五人の子を育てさせて、自分は外へ働きに出ていたのだが。働きに出たといえばきこえはよい。金さえ送ってくれたら、電灯代くらいは払えそうなものだ。母と子の五人暮しはまったく村の笑いものだったらしい。物心つきはじめて他人の家を羨しく思うようになったのは、六十三戸の部落のどの家にも電灯というものがあり、わが家だけにそれがなく学校の宿題も出来なかったことである。家にだけ灯りがないということは淋しく灯のない夜はかなしいということが、身に泌みた。

大正八年生れだから調べてみると、この時代は農村恐慌の真只中で、村の娘はみな京都、長浜へ糸繰り、友染工場へゆき、男は丁稚。中学へゆける子は、区長さまの家ぐらいだった。しかも都会へ出た次男、三男は、不思議とみな肺病になってもどり、多いときは、十戸ぐらいは、かならずゴクツブシとよばれる次男がいた。裕福な農家でも、一町にみたない田仕事だし、小作人が

三分の一をしめる岡田の貧乏人は、大工、左官、屋根ふき、木挽が現金収入の道で、大酒を二、三日喰らっただけで、一夜で青田を失う家も出た。母は冬がくると、雪の吹きこむ家を歎いた。大工の父は施主さまの板を家のまわりにたてかけておきこそすれ、穴一つふさがない。それで、母はそれらの板を穴ふさぎにつかったが、その板も父がもどってひきぬいてゆく。だから、寝どころのふとんは、水をふくんだように湿気て、子供らはいくら体をねじまげて寝ても寝つかれず、外海の波が和田の釈迦浜にくだける音を聞きながら、ふるえていたのである。この幼少期のおかげで、私はいまも、東京で羽根ぶとんの軽さを好まない。重くどっしりした蒲団でないと寝つけないのだが——。

そのわが家に盲目の祖母がいた。若いころに小豆のサヤで目をついて、放ったらかしにしていたので両眼失明。だが、この祖母は「村歩き」をした。区長の家から用事を言いつかってふれ歩くのである。盲目なのだが、石ころも牛の糞もよけて通れるほどカンがよかった。私はこの祖母の背に負われてよく道びきしたという。赤ん坊のころだから記憶はないが、この祖母が歩きながら言った台詞に「六右衛門は区長さんで、六左衛門は村歩きや。右と左でこんだけちがうもんか」というのがある。私の家は六左衛門といったからである。六右衛門は斎藤六右衛門で、いまも部落の長をつとめる素封家で、なるほど右と左のちがいだけで、白壁土蔵を三つもつ大屋敷の家と、コジキダンの木小舎を改造した家との差があった。コジキダンは、林左衛門というこれも素

封家の所有地で、わが家は、木小舎を借りて住んでいたという。

私は父母のなごやかな談笑をみたことがなかった。盲目の老母とその息子と嫁に、五人の子がごろごろ生れたのである。父はどこからか帰ってくると、不気嫌な顔で、何やら持ち出す。母が怒る。父が撲る蹴る。母は泣きながら、私らの手をひいて、村のかみの文左衛門へ逃げる。この文左衛門は母の里で、後家の老母がいた。ここには、しかし風呂があった。コジキダンには風呂はなかったので雪道をてくてく風呂もらいに村をまわった。文左衛門へゆくとその風呂があるので嬉しかったのだ。

何一つ思いだしても、わが生家は生活苦の資料ばかりで、世間なみの温かい団欒というものはなかったように思う。そのような環境に育ったので、在所というものは、私にとっては、いつも冷えたもの、暗いもの、つらい所としてうつり、同時に、また私だけのぬくもりもあった。十歳で出家得度して京都の禅寺へ小僧に出たのは、部落の作左衛門という道路工夫が京の相国寺の山内の住職が子だくさんの家のまびき子を求めているときいて教えてくれたからである。出家したい気持など私にあるはずもなく、ただ、このような家を出れば、母の生活苦が少しでもやわらぐだろうと子供心に思ったものだ。

私はこの稿を書くため、いま若狭の生家跡に佇んでいる。ここはコジキダンだが、家はもうな

い。くさりはてたのである。父がのち昭和二十五年に松の下とよぶ、これも竹にかこまれた反対側の山裾へうつしたためである。私は山かげの草茫々となった台地にいま立っている。前面に大きな土蔵がある。林左衛門さんの外蔵で、それで陽をさえぎられた三十坪ほどの台地は、ここに昔、家があったとは信じられぬ空地だが、北の隅までゆくと、蛇いちごの繁茂した崖ぶちに川がながれ、そこは深くえぐれている。下に川戸とよんだ淵がある。野菜を洗ったり、米をといだり、夏は行水をつかった所だ。だが干魃がつづくと、この水はよく枯れたので、林左衛門さままで呑み水をもらいに坂を降りた。真夏の母といえば、水をもらって坂をあがってくる朝夕のあの脂汗をながして天秤をかつぐ姿がうかぶ。

私は、今日九月二十五日をえらんで在所へ帰った。父が去年の同日に死亡して、その一周忌の法事が営まれるからである。もちろん法事の席へ出席するつもりでいるのだが、父の死んだ去年まで、わが家は死人が出ていない。つまり、盲目の祖母が死んで以来なので、こんどの法事は、祖母の五十周忌もかねてとり行なわれるのだった。当然なことだが、父は盲目の母（私たちには祖母）の眠るさんまいに、去年埋葬された。この時、棺をかついで穴へ入れた私は、スコップで土をふりかけていて、ふと父を哀れに思った。父のことを思って涙をながしたのは、この日以外にない。じつは、――盲目の祖母が父の母であったという一事に思いを改めて愕然としたからである。父水上覚治はいまから八十六年前、このコジキダンに生れている。十九の時に母の失明に

遇う。私はこの世に眼を失った母をもたねばならなかった十九歳の父の気持になってみたのである。私の母は盲目ではない。嫁にきたころはすでに祖母は盲目だったので、苦労もまたいちばいのものがあったろう。

母は十六で嫁にきた。そうして盲目の母を助けて私らを育てたのだが、父がなぜ盲目の母の下で、一生懸命働く嫁をいじめたのか、理由はわからない。なぜあんな荒小舎のままの家に盲目の母と私らを置いて電灯もつけずに昭和十九年まで放ったらかしたのか、それも理由はわからない。父には虚無的なところがあって、仕事もよりごのみし、あそびあるく日が多かった。父母の喧嘩は、幼少期の私のもっともかなしい記憶だが、このような祖母、父母の姿も私の精神形成に影をなげたのである。すなわち、今日、私は、貧しい者はみな温かく手をとりあっているぞというような文句を信用しないのである。貧しい者は、手をとりあうどころかいつもガミガミいがみあうものだ。人間は腹がへれば気がたつ。しなくてもいい喧嘩もするということを思い知ったのである。

だが、その貧しいおかげで、何かトクがありはしなかったか。そこのところを考えてみると、たしかにそれはある。「物のありがたさ」が身に滲みるこころが先ず第一である。京都へ出るまで、私はアサヒ靴を買ってもらわなかったが、今日でも皮グツをみると、ありがたいと思う。靴下をみてもありがたいと思う。いつもはだしで歩いていたからである。クツをみてありがたいと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c